

第2回刈谷市美術館リニューアル計画検討委員会 議事要旨

日 時： 令和7年10月14日（火）午後3時～5時30分

場 所： 刈谷市美術館 2階研修室

出席者：委 員 長 村田真宏氏（豊田市博物館 館長）
副 委 員 長 栗田秀法氏（跡見学園女子大学 文学部 教授）
委 員 中村僚志氏（愛知教育大学 創造科学系美術教育講座 教授）
委 員 鈴木康則氏（刈谷文化協会 会長）
委 員 加藤英樹氏（刈谷市商工会議所 会頭）
委 員 馬場千春氏（刈谷市立さくら保育園 園長）
オブザーバー 市民活動部 伊藤部長
事 務 局 市民活動部 石川文化振興監
刈谷市美術館 鈴木館長、神谷専門員、土居学芸員
企画財政部施設保全課 石田課長補佐、上條主任主査、阿部主任主査

- 次 第：1 前回の議事要旨について
2 議事
（1）リニューアル後に目指す姿の検討
（2）事業計画の検討
3 その他

議事概要（委員のおもな意見）：

議事（1）「リニューアル後に目指す姿の検討」案について

[事務局説明]

リニューアル後に目指す姿を検討するため、事務局から次の内容について説明。美術館を取り巻く情勢、新・美術館の方向性、3つのコンセプト案〈芸術文化を「守り伝える美術館」〉〈美術を通して「楽しさや感動を分かち合う美術館」〉〈多様な人びとと「交流し共につくる美術館」〉など。議事が進行し、委員から以下のような意見をいただいた。

[委員からの意見]

- ・資料を守るための設備の整備が必要と実感した。また、市民が交流しやすい美術館を目指すことはよいことだ。「美術館」というと敷居が高いイメージがあるが、子どもが美術に興味を持つきっかけとして、また、高齢者のリタイア後の楽しみとしてなど、年齢を問わずいろいろな方が利用できるような生涯学習の場となるとよい。賑わいや交流が広がれば、地域の商工業にもプラスに作用するのではないか。事業については、総花的になりがちなので、今後、具体化していけるとよい。
- ・事務局が提案する3つのコンセプトについてよく分かるが、「楽しさや感動」は個人で感じるものであり、分かち合う必要があるのか。「楽しめる」という言葉は説明に使われているので、「楽しむ」でよいのではないか。
- ・あらゆる人が楽しめ、自らの地域の施設であるという意識を持てることが重要だ。「交流し共につくる美術館」はよい。また、「分かち合う」について、最近では一人で見ただけでなく鑑賞を共に行う視点も重視されている。東京都美術館で展開する「とびらプロジェクト」においても、みんなで見る視点を重視した取り組みが行われている。さらに、ビジネスの研修に取り入れられるなど、みんなで鑑賞することが新しい視点・発見につながる。美術を大人が楽しめるという視点も大事だ。
- ・対話型鑑賞の導入は検討しているか。
(事務局) 検討している。
- ・刈谷市の上位計画では、今のところハード面での具体的な整備に関する内容は明確に位置づけられていない。行政側の熱量はどの程度あるのか。
(事務局) 上位計画については、第3次刈谷市文化振興基本計画の再来年の策定を目指し検討中である。本委員会が立ち上がったことは、美術館再整備の必要性を認識し、市として取り組んでいくことを示している。
- ・市民から「楽しそう」「行ってみたい」と思ってもらえるようなイメージの言葉を付け足して、難しそうなイメージを払拭する必要がある。
- ・一言で方向性を言い表せるような、より良い言葉、市民にも館の運営に携わる人にも指針になる言葉があるとよい。

- ・基本的には、「楽しい」ということは中心にあると思う。その工夫が必要ではないか。
- ・「守り伝える」は、事務局としては展覧会の開催をイメージしたのだろうが、ミュージアムの世界では、「守り伝える」という表現は「保存」に特化した印象もある。「展覧会」の意味も含まれていると思うので、それを表現できる言葉が必要。そうすると、「分かち合う」はいろいろな意味を持っており、展覧会の意味も持つのではないか。表現の再考が必要だ。

議事（２）「事業計画の検討」案について

[事務局説明]

議事（１）の３つのコンセプト案をもとに、事務局側が想定する事業計画案について説明。委員から以下のような意見をいただいた。

[委員からの意見]

- ・学芸員だけでなく、外部と連携したワークショップ、あるいはスタッフがなくても体験できるようなプログラムも必要だ。
- ・美術館が実施した「リニューアル検討ワークショップ」のアンケート結果では、親子でアート体験、創作体験等の活動ができることが重視されている。子どもの創作体験を通して、本人の主体性に働きかけることは重要だ。設備面では、収蔵品は増えることはあっても、減ることはない。収蔵スペースを増築できる方法も含めて設計段階で検討しておくべき。
- ・ワークショップへのニーズは高い。コミュニティとの関わりは近年重視されている。
- ・美術館の再整備にあたっては、人員体制の補強も必要だろう。人の動きも重要だが、駅前からの誘導も検討する必要がある。駅前のまちづくりまでを担うのは厳しいだろう。地域のシンボルという位置づけが現実的なのではないか。
- ・美術館が集客力のある展覧会を開催した場合、街の商売をする人を取り込むのは難しいか。
- ・限られた敷地の中で大きな収蔵庫を整備するのは難しい。近年、共同収蔵庫の整備の動きも見られる。
- ・「共創」について、旧来からある友の会の形式、賛助会員や客員学芸員による活動等を展開するなら、その拠点となるスペースが必要だ。
- ・地方都市の美術館で、カフェが運営できなくなるケースが多い。美術館が開館していない時間でもカフェを利用できるなど、継続的な運営方法を検討するとよい。また、屋外にポケットテラス、マルシェ等があるとよい。人びとが交流できるスペースでは、無料の空間にきちんとしたケースを作って絵本原画やポスターを鑑賞できるなど、本来の登録博物館の理念にあるように無料で楽しめる場所が実現できると良い。美術館に行けば何か楽しめる仕掛けがあるとよい。
- ・交流スペースにも展示があって、浸透し合うような形になると良い。
- ・学校の美術部活動の受け皿、また、親子での体験ができる場としての役割が美術館に求められており、新しい美術館でそういう機能を果たしていくことは重要だろう。

- ・博物館法改正において、文化芸術基本法の下部法令としても位置づけられている点も押さえておくべき。
 - ・「もう一回行ってみたい」と思ってもらえる仕掛けが必要。「夢と学びの科学体験館」では、イベントのポスターが身近に掲示されており、イベントに参加するきっかけになっている。また、3年に1回、全園児の絵が美術館に展示される取り組みでは、美術館に飾られることが大事で、それが美術館に足を運ぶきっかけや再来館のきっかけにつながっていく。
 - ・観光やユニークベニューに関する視点を取り入れることも必要だ。ユニークベニューという結婚式という発想になるが、スペースの都合上なかなか対応は難しい。もっと簡単な取り組みとして、例えばJAとの連携による軽トラ市や、アートブックフェアなどがある。「ユニークベニュー」という言葉を追加してはどうか。行政財産の目的外使用だと、カフェは維持できない。美術館と民間企業とが共同経営するようなかたちで、赤字も利益も折半するなど、うまく運営されている館もある。
 - ・「バリアフリー」は当たり前の話。すべての人にユニバーサルなサービスをどう提供するかが、今の水準である。キッズスペースを利用しやすい場所に配置すると利用率が高く、「誰でも来てよい」というイメージ作りにも役立つ。
 - ・ユニバーサル化という視点では、触れる鑑賞なども常設している事例がある。医療・福祉との関係で、社会的処方箋、回想法等も取り入れられている。
 - ・これだけのことをやろうとすると、人員がたくさん必要になるが、予算は足りるのか。例えば、絵本の出版社に参画してもらい運営するということはできないか。民間企業にコーナーを運営してもらい、代わりに販売を許可する等も考えられるのではないか。
 - ・整備段階においてサウンディングを開催し、カフェやショップの事業者に出店の条件や要望を聞くこともできるだろう。ネットワークを活かして意見を聴くことも必要だが、公式に発表してサウンディングを行うことで、より多くの意見を得ることができ可能性が拡大する。
 - ・油絵を始めようとしても、画材屋がなく手に入らないという意見や、画材の匂いが気になるので、家で油絵を描けないという人もいる。こうした人たちの受け皿になることも考えられる。
 - ・人が集まるスペースが必要。初心者でも美術館との関わりがあると、モチベーションにもなるし、人の輪が広がるきっかけとなる。
 - ・スタッフ体制の充実が重要。学芸員だけでなく、学校・市民・団体との連携のためのスタッフが必要。学校との連携ならば、教員関係者を配置したり、社会教育主事や社会教育士を配置したりする館もある。必要なノウハウを支える体制を構築していく必要がある。運営体制について、次回の検討会で示してほしい。
 - ・次回の検討委員会ではどのような議論を行う予定か。およその施設規模、人員数等を示してほしい。
- (事務局) 次回が最後の検討委員会になるので、基本計画素案をまとめたい。面積の概算も提示したいと考えている。人員数を明確にできるかは分からないが、必要な人員体制は整理しておきたい。素案をもとに委員会で議論いただいて、それを元にリニューアル計画を具体的に進めていきたいと考えている。